

## ■ 研究発表論文

# 来街者行動圏域と空間の選好から見た街の魅力の構造に関する研究

## The Structure of Town Attachment from the Aspect of Town Visitors' Behavior Sphere and Preference Sphere

宇佐美卓\* 杉田早苗\*\* 土肥真人\*  
Taku USAMI Sanae SUGITA Masato DOHI

**摘要** 本研究は東京都渋谷区神宮前地域を対象とし、来街者が街を経験していく過程の中で、来街行動圏域と空間の選好の空間的相関を把握する事を目的とする。圏域図示法によるアンケート調査を実施し、来街者の選好圏域と選好理由についてクラスター分析を行なった後 GIS により空間的分析を行なった。さらに選好圏域と行動圏域の相関についても空間分析を行なった。その結果、以下の結論を得た。1.来街者は実際に街を経験するに従い、行動圏域を変化させていくことがわかり、さらに被験者全体で見ると行動圏域の偏りも少なくなっていくことがわかった。2.選好圏域と選好理由の関係から、空間の選好と選好圏域の形態が多様化していくことが明らかとなった。3.選好圏域と行動圏域の関係は、一旦ずれを生じる過程を経て、その圏域の地理的な配置が一致していく傾向が把握された。

### 1. はじめに

#### (1) 研究の背景・目的

来街者は何度かその街を訪れ、経験を積む事で、その街の構造を把握し、自ら選好する空間を獲得していくと考えられる。街を訪れた人間にとって、訪れた街空間の中で如何に自身の履歴を積むかは、そこで行なわれる行為とその選択に大きく関わるものであると指摘されている<sup>1)</sup>。その過程を明らかにすることは、来街者にとって魅力ある都市環境計画のあり方に重要な示唆を持つものと思われる。空間の認知に関する研究では、来街頻度など実際に空間を経験することが大きく影響すると指摘されている。中田ら<sup>2)</sup>は空間の認知に関して、大学キャンパス内の移動などの経験行動によって認知領域が形成されていることを明らかにし、小林ら<sup>3)</sup>、山本ら<sup>4)</sup>は、街路空間における行動経路は利用経験が高い空間ほど安定してよく使われることを指摘している。これらの既往研究においては空間行動とその空間の利用経験との関係性が指摘されている。また、空間における行動と意識の相関を見た研究では SD 法と因子分析による定量的研究がいくつか見られる<sup>5)</sup>。以上の様に、空間における経験という尺度を通して人間行動と意識を見た研究はあるものの、具体的な行動圏域と選好圏域を取り扱った上で、圏域像と選好する意識との相関関係を統計的に分析したものは管見ではない。以上を踏まえ、都市空間において来街者の「街を経験する度合い」に着目し、街を経験していく過程の中で、来街者がどのように魅力を感じ来街行動を行なっているのかを分析し、行動圏域と空間の選好の相関を空間的に把握し、考察することが本研究の主たる目的である。さらに、行動圏域・選好圏域・選好理由という空間と意識の相関についての定量的な空間分析に関する方法的検討も本研究の目的である。

#### (2) 研究の方法と構成

本研究では、対象地における来街者に対し行動圏域と選好圏域に関する圏域図示法<sup>6)</sup>によるアンケート調査を行った。これにより得られた地図データを空間的に分析するため GIS (地理情報システム) を用いた。対象地を縦 100 個×横 100 個、計 10000 個の 20m 四方メッシュに区切り、回答領域と重なるメッシュを選択した図を各被験者について作成した後、各メッシュにおける回答者数の合計を示したメッシュ図を作成した。なお本研究においては、併走する街路を判別する事が必要であるため 20m 四方メッシュを設定した。研究の構成は、2 章で対象地、3 章で調査結果につ

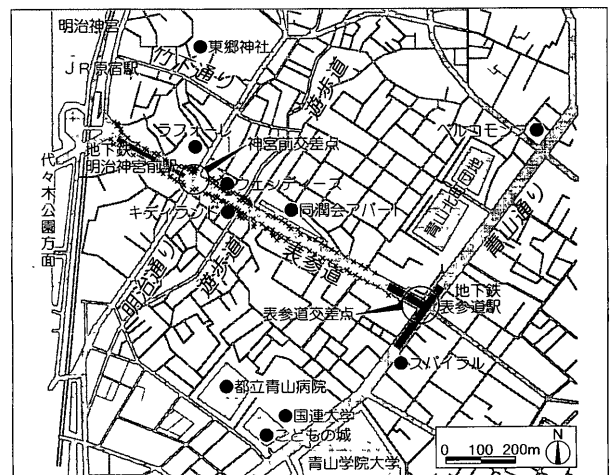


図-1 対象地地図 (×は調査地点)

いて概観した後、4 章では来街者の行動圏域と街を経験する度合いに関する空間分析、5 章では街を経験する度合いに着目し、来街者の選好圏域と選好理由の組み合わせパターンに関するクラスター分析を行ない、さらにその結果に対して空間的分析を行なう。6 章では街を経験する度合いからみた来街者の選好圏域と行動圏域の関係について空間分析を行ない、考察を行なう。

### 2. 対象地について

本研究では、東京都渋谷区神宮前地域を対象地【図1】とした。表参道は青山通りと明治通りをつなぎ、この界隈の交通の主導線であるとともに、商業機能の中心的役割も果たしている。一方、明治通りに併走する遊歩道は以前、渋谷川が流れ歩道が附随していたが、現在は渋谷川に蓋をして遊歩道となっている。当時の住民の要望から車止めが設置されているため、車交通は認められているものの実質的には殆ど交通は見られない。この遊歩道周辺は中高層住居専用地域に指定されており、主に住空間として利用されていた。しかし近年の表通りや隣接する商業集積地の拡散に伴い、住宅地域の中に小規模な個人商店が多数現われ始めたことから、来街者は表通りだけでなく、遊歩道を含めた裏通りへと行動圏域を拡大していることが報告されている<sup>7)</sup>。このような状況に

\*東京工業大学大学院情報理工学研究科 \*\*東京工業大学大学院社会理工学研究科

対し、日端は神宮前地域において住宅と事務所建築物、商業施設といった複数の用途が混在化し定住人口の減少を招いた事を指摘している<sup>8)</sup>。

表-1 質問項目

Q1 来街方法	Q6 回遊性のある他地域
Q2 来街目的	Q7 現在よく行く場所
Q3 来街頻度	Q8 雰囲気が良いと思う場所
Q4 来街歴	Q8-a 良いと思う理由
Q5 他地域との回遊性の有無	

表-2 属性データ

○性別	男性	女性	○年齢構成	10代	20代	30代	40代	50代
	62 (42)	86 (58)		58 (39)	76 (51)	8 (5)	1 (1)	5 (3)
○職業	学生	アルバイト	社会人	主婦	無職	他	無記入	
	84 (56)	12 (8)	33 (22)	7 (5)	2 (1)	10 (6)	1 (1)	
○居住地	都内23区内	都内23区外	千葉県	神奈川県	埼玉県	大阪府	他	無記入
	57 (39)	28 (19)	19 (13)	18 (12)	12 (8)	3 (2)	6 (4)	5 (3)

注) 単位は人、( )内は%

表-3 来街者傾向単純集計

Q1 来街方法	電車	渋谷から徒歩	自宅から徒歩	車	その他	計				
	103 (70)	28 (19)	3 (2)	10 (7)	4 (3)	148 (100)				
Q2 来街目的 (複数回答)	通勤通学	飲食	買物	カイト・ウツロ	待合せ	何となく	その他	計		
	19 (13)	16 (11)	89 (60)	24 (16)	14 (9)	23 (16)	16 (11)	201 (100)		
Q3 来街頻度	週1回以上	月1回以上4回未満	月1回未満	計						
	40 (27)	55 (37)	53 (36)	148 (100)						
Q4 来街歴	11年以上	6年~10年	5年未満	計						
	43 (29)	49 (33)	56 (38)	148 (100)						
Q5 他地域との回遊性	ある	ない	計							
	90 (61)	58 (39)	148 (100)							
Q6 回遊性のある他地域 (複数回答)	渋谷	青山	新宿	恵比寿	代官山	池袋	六本木	無回答	無回答	計
	37 (35)	13 (12)	24 (23)	2 (2)	9 (8)	3 (3)	2 (2)	8 (8)	8 (8)	106 (100)

注) 単位は人、( )内は%、Q6はQ5で「ある」と答えた人の延べ回答数

3. 調査概要

調査は、対象地における中心的通りである表参道にて1998年12月14・15日午後2日間に渡って対象地域への来街者計148名に行なった。アンケートは調査人員10名による指示的面接調査であった。調査地点については【図1】<sup>9)</sup>、質問項目については【表1】を参照されたい。

被験者の属性データは【表2】である。被験者の年代は10・20代、職業は学生が多数であり被験者属性に偏りが見られ、対象地において今までに行なわれた来街者調査<sup>10)</sup>と同様の傾向を示しており、この街の来街者の持つ特性といえる。

質問事項の中から来街者の属性等を聞いたQ1~Q6までの回答結果をまとめたのが【表3】である。来街方法では、電車利用が最も多く、ついで徒歩となっているが、中でも渋谷方面から徒歩で来た被験者が多く28名であった。これはQ6<回遊性のある他地域>で渋谷との回遊性があると答えた37名の75%に当たり、隣接する商業界隈である渋谷と原宿を徒歩で行き来する人が多い事を示している。来街目的については、「買い物」が最も多くを占めたが、「なんとなく」や「ウィンドウショッピング」など明確な目的を持っていない来街者もあり、対象地がゆとりや楽しみを求めて利用されている空間であることが理解できる。本研究では来街者の街の経験の度合いとして来街頻度、来街歴に着目して分析を進めていくため、被験者をそれぞれ3グループに分け、Q3<来街頻度>での回答「週1回以上」「月1回以上4回未満」「月1回未満」をそれぞれ「頻度高」

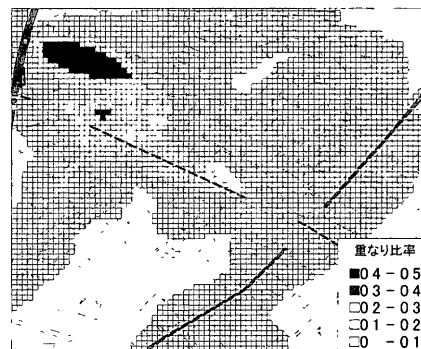


図-2 「現在よく行く場所」分布図

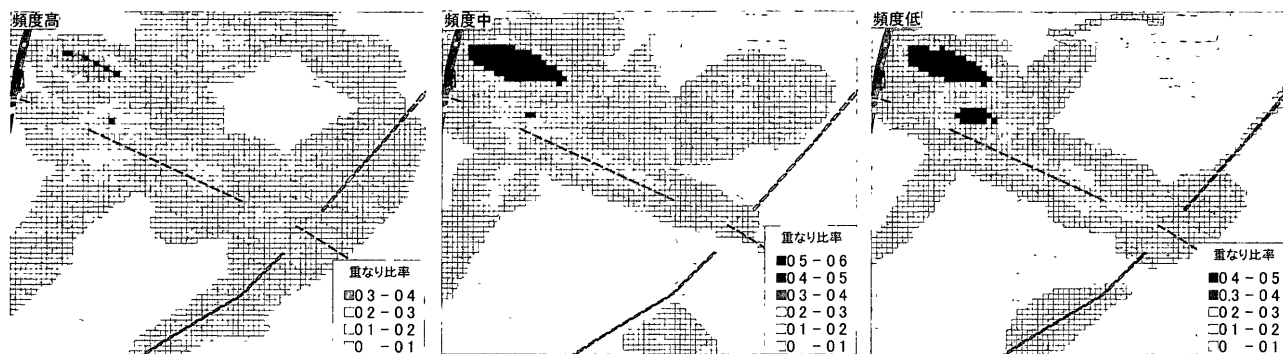


図-3 来街頻度別にみる「よく行く場所」分布図

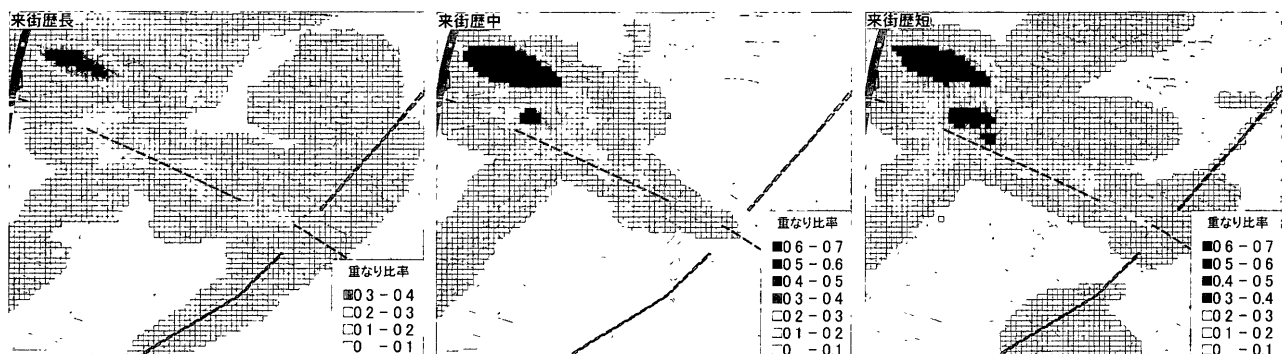


図-4 来街歴別にみる「よく行く場所」分布図

「頻度中」「頻度低」, Q4<来街歴>での回答「5年以下」「5年~10年以下」「10年~」をそれぞれ「来街歴短」「来街歴中」「来街歴長」と記述する<sup>11)</sup>。

4. 来街者傾向から見た行動圏域分析

(1) 被験者全体の行動圏域

Q7<現在よく行く場所>の回答者数の分布率<sup>12)</sup>を【図2】で示した。竹下通り周辺では最も多い分布率が見られる。さらに神宮前交差点を中心として表参道, 明治通りの周辺にも高い分布率が見られる。行動圏域は表参道南側に広がる地域の一部を除いて対象地のほぼ全域に広がっている。

(2) 来街頻度別に見た行動圏域

Q3<来街頻度>の来街頻度別に Q7<現在よく行く場所>の分布率を【図3】で示した。「頻度高」の分布を見ると、竹下通り沿いの地域、神宮前交差点を中心とした地域の他に、遊歩道の北部地域、表参道沿い青山通り寄りの地域などいくつかの塊にわかれた。また行動圏域全体は広く拡散しており、分布率も低くなっている。「頻度中」では竹下通りの分布率が高くなっており、ついで表参道と明治通り沿いが高くなっている。また行動圏域の広がり「頻度高」に比して小さくなっている。「頻度低」では「頻度中」と同様に竹下通りの分布率が高くなっているが、その他にラフォーレ原宿周辺の分布率も高くなっている。行動圏域全体は「頻度中」からさらに狭まっている。以上より、来街頻度が高いと分布率が集中する場所が少なくなることがわかる。同時に行動圏域全体が延長・拡大するが、不連続的な個別の行動圏域が成立するようになり、頻度が高いほど、特定した行動圏域が成立していると解釈することができる。

(3) 来街歴別に見た行動圏域

Q4<来街歴>の来街歴別に Q7<現在よく行く場所>の分布率を示したものが【図4】である。「来街歴長」の分布率は、竹下通りと神宮前交差点から青山通りまでの表参道沿いで多少高いものの全域的に分布率が高い場所は見られない。行動圏域は他の来街歴に比べて最も広範である。「来街歴中」では竹下通りに分布が最も集中している。他には、分布率は下がるが、ラフォーレ原宿周辺を中心とした同心円上の分布と、原宿駅から同潤会アパート前周辺までの表参道沿いの分布も見られる。行動圏域全体としては「来街歴長」と比べて明らかに狭くなっている。「来街歴短」では、「来街歴中」の様な集中的な分布傾向が多少弱まり、分布率の高い場所が竹下通りとラフォーレ原宿周辺に分散している。他の来街歴では見られない明治通り沿いの分布の高さは特徴的である。「来街歴短」の被験者は唯一、表参道南側の遊歩道を行動圏域としていない。以上をまとめると、来街歴がある程度長くなると分布が集中し、行動圏域全体も一旦狭まるが、さらに来街歴が長くなると来街者の行動圏域の偏りが少なくなり、同時に行動圏域が拡散する傾向を示しているといえる。

5. 来街者傾向から見た選好圏域分析

Q8<雰囲気が良いと思う場所>で回答の得られた場所について、4章と同様に各メッシュにおける回答数の分布図を作成した。さらに Q8-a<よいと思う理由>で得た選好理由を変数とし、その場所を良いとした選好理由の得票数が 20 以上のメッシュをサンプルとしたクラスター分析を行なった<sup>13)</sup>。クラスター数は 6 とした<sup>14)</sup>。さらに各クラスターにおける選好理由の

総得票数に対する、メッシュ当たりの各選好理由の得票数を得票率として算出し、【表4】に示した。そして、サンプルとなった各メッシュについての空間的なまとまりや、それらの地理的配置をみるため、各クラスターに属するメッシュの分布を示した【図5】~【図7】<sup>15)</sup>。

(1) 被験者全体の選好圏域

被験者全体を対象として行なったクラスター分析結果に対し、クラスター毎のメッシュの分布を示した【図5】によると、選好理由の組み合わせパターンによって対象地が分節されていることがわかる。デンドログラムを見ると表参道周辺に分布するクラスター4、6と5、3がそれぞれ近い位置にあり、その他は遊歩道を含めたクラスター1、竹下通りを含んだ2など場所によって選好理由の組み合わせパターンも異なっている。表参道を中心としたクラスターで多かった理由は「大人の雰囲気・華やか・親しみがある・便利」などで、繁華な表通りの雰囲気への評価である。また、歩道の幅員が広めにとられた物理的環境に対する評価として「道が広い」が高かった。一方、遊歩道など表参道や明治通りから奥まった地域と青山通りに位置したクラスター1では「大人の雰囲気・華やか・活気」といった表参道と同様の理由の他に、「落ち着いた感じが親しみ・静か・歴史を感じる」などの理由が多く見られた。竹下通り、青山方面を含むクラスター2については【表4】を見てもわかるように、他のクラスターに比べて選好理由の偏りが少なく、特色ある空間としては認識されていないことがわかる。以後では来街頻度と来街歴によってさらに詳細に見ていく。

表-4 クラスター結果及び選好理由別得票率

Table with 20 columns representing reasons for preference and rows for clusters and sub-clusters. The table is a dendrogram-style data matrix showing the relationship between clusters and individual reasons.

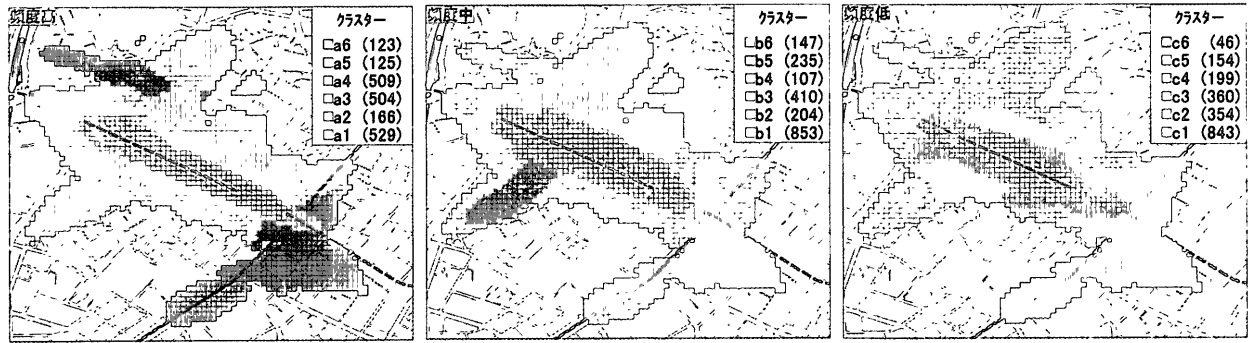


図-6 来街頻度別にみる選好圏域に関するクラスター分析図

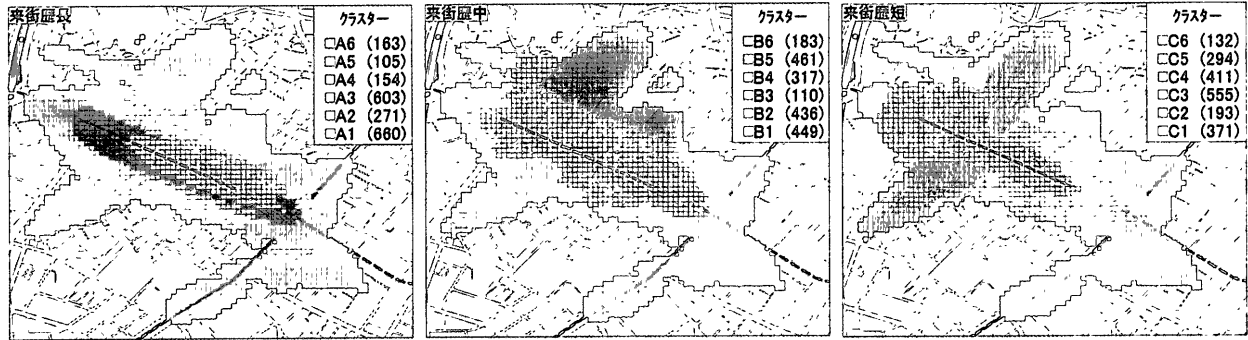


図-7 来街歴別にみる選好圏域に関するクラスター分析図

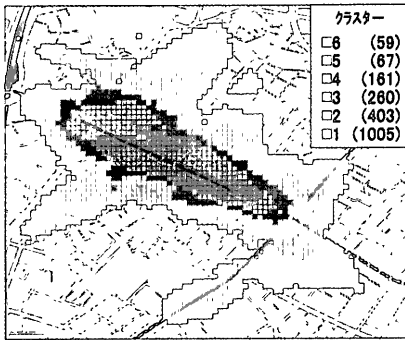


図-5 被験者全体の選好圏域分析図

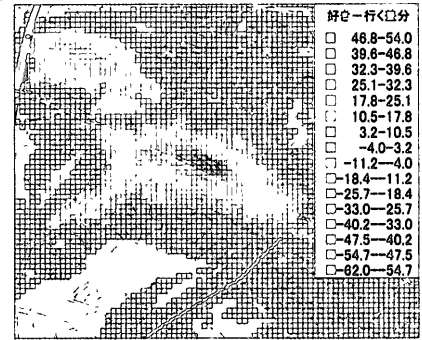


図-8 被験者全体の「選好圏域・行動圏差分」図

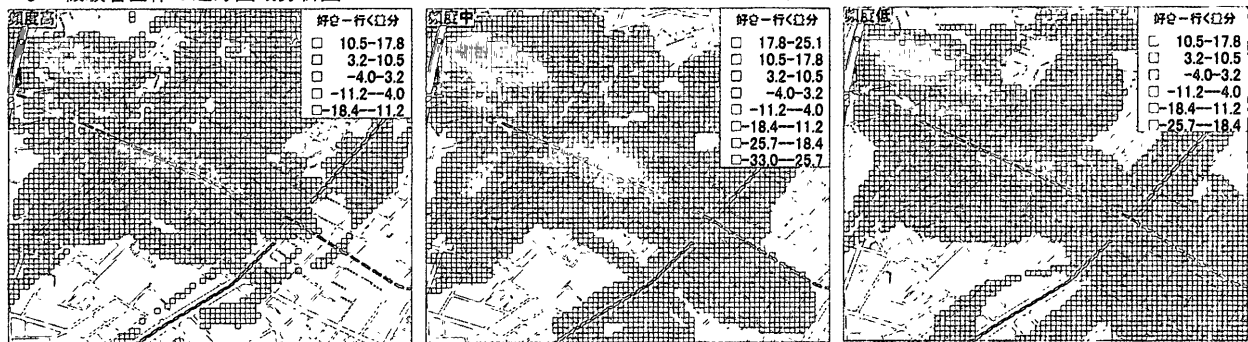


図-9 来街頻度別にみる「選好圏域・行動圏差分」図

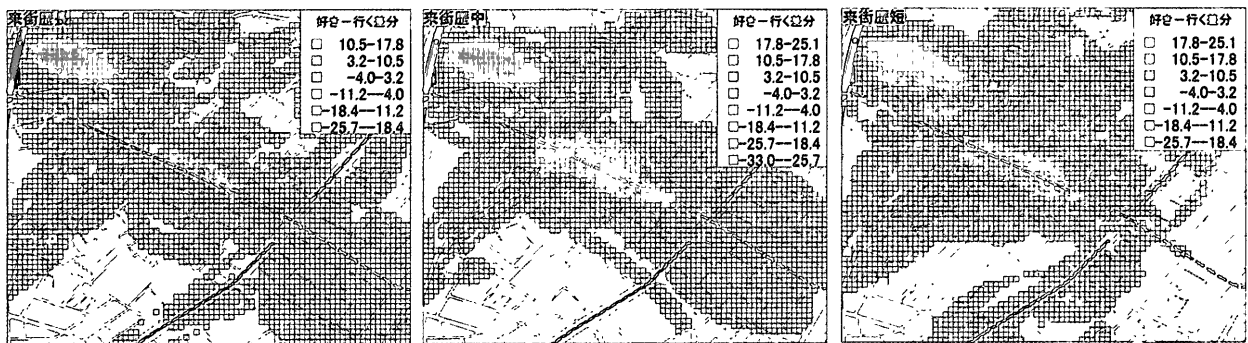


図-10 来街歴別にみる「選好圏域・行動圏差分」図

## (2) 来街頻度別に見た選好圏域

来街頻度ごとの被験者グループについて選好圏域としてのメッシュと選好理由に関してクラスター分析を行なった所、被験者全体的場合と同様、【図6】のように選好理由の組み合わせパターンによって対象地が分節された。

### (i) 「頻度高」の選好圏域

表参道周辺は東西でクラスター a5, a6 に分かれ、どちらも「自由な雰囲気・くつろぎ・落ち着き・お洒落」という意見が多く、被験者は表参道に対して閑静さを感じていることがわかる。遊歩道については表参道の南北でクラスター a3 と a1 に評価パターンがわかれた。「自由な雰囲気・くつろげる」と共通した評価の他に、南側のクラスター a1 では「お洒落・便利」、北側のクラスター a3 では「道が狭い・静か・落ち着き・個性的」といった選好理由が多く評価が分かれた。これは北側の遊歩道からさらに奥に入った住商混在地を評価した結果と考えられる。

### (ii) 「頻度中」の選好圏域

表参道周辺のクラスター b5, b6 には「自由な雰囲気・お洒落・若者の雰囲気・道が広い」が多くみられた。遊歩道については「頻度高」と同様に表参道の南北でクラスター b3, b4 とわかれた。南北で共通して高かった選好理由としては「お洒落」が非常に多く、次いで「自由な雰囲気」であった。異なるものとしては、南側では「静か」が特に高く、次いで「親しみ」となっており、他ではあまり見られなかった「歴史を感じる」の評価も高かった。北側のクラスター b3 では「安心して歩ける・くつろげる」という理由が多かった。

### (iii) 「頻度低」の選好圏域

表参道周辺に対するクラスター c4, c5, c6 では「若者の雰囲気・自由な雰囲気・お洒落」など若者で賑わう街としての評価が多い。遊歩道と青山通りの一部を含むクラスター c3 では「自由な雰囲気・親しみ・くつろげる・人通りの少なさ」など閑静な雰囲気が評価された。表参道交差点から青山方面のクラスター c2 では「大人の雰囲気・洗練・清潔」と高級感あるイメージとして評価された。その他、南北両側の遊歩道を含むクラスター c1 では「若者の雰囲気・活気・お洒落」の評価が高かった。

### (iv) まとめ

以上から来街頻度が高い被験者ほど、選好理由として閑静さを挙げる傾向が見られた。特に選好圏域として挙げられていた表参道、遊歩道については、繁華街としての評価も残りつつ、閑静さに関する理由が多く見られた。また、来街頻度が高い被験者ほどクラスター間のメッシュ数の開きが少なくなり、面積が等しくなっている。また、表参道を中心としそこから広がる選好理由の組み合わせパターンの分布から、表参道でも東西に分かれ、さらにそこから奥まった地域が表参道の北側と南側とで分節されるなど、各クラスターに属するメッシュの空間的なまとまりと、さらにこれらの地理的な配置に関する相互関係が変化していることがわかる。

## (3) 来街歴別に見た選好圏域

来街歴ごとの被験者グループについて、選好する空間を表すメッシュと選好理由に関してクラスター分析を行なった結果、被験者全体的場合と同様、【図7】のように選好理由の組み合わせパターンによって対象地が分節された。

### (i) 「来街歴長」の選好圏域

表参道周辺の分布であるクラスター A4, A5, A6 では「自由な雰囲気・道が広い・お洒落」が多い。「大人の雰囲気・道が広い・華やか」などが原宿駅前と青山方面に分布するクラスター A3 で多い。クラスター A1 では遊歩道沿いや明治通りから竹下通りなども含んでいるが、これらは統合的に「自由な雰囲気・道が広い・くつろげる・開放的・お洒落」など多様に評価されたと

考えられる。表参道の北側の奥まった地域に分布するクラスター A2 では「道が狭い」が他と比べ特徴的であり、さらに「くつろげる・落ち着き」など閑静さが評価された。

### (ii) 「来街歴中」の選好圏域

表参道周辺を中心に分布するクラスター B5, B6 では「若者の雰囲気・自由な雰囲気・安心して歩ける・お洒落」が多かった。遊歩道沿いではクラスター B3, B4 で南北にわかれ、「自由な雰囲気・お洒落」が共通し、南側では「親しみ・落ち着き・静か」と閑静な場所として評価された。北側の遊歩道では「安心して歩ける」が多く、「便利・情報豊か」と利便性について高く評価された他に全体的に挙げられる事の少ない「眺め良い・道が狭い」が良いと評価された。青山方面はクラスター B2 の分布が広がり「大人の雰囲気・洗練・清潔」という評価に集中した。

### (iii) 「来街歴短」の選好圏域

表参道周辺の地域は、同潤会アパートを中心としたクラスター C6 と、神宮前交差点を中心としラフォーレ原宿なども含む JR 原宿駅寄りのクラスター C5 がある。C5 と C6 では「若者の雰囲気・自由な雰囲気・明るい雰囲気・お洒落」が共通し、C5 では「便利」という回答が多く、駅に近い立地特性を評価していると捉えられる。南北の遊歩道沿いを含むクラスター C4 では、他のクラスターと比べても「くつろげる」が圧倒的に多く、他にも「落ち着き・親しみ・自由・お洒落」など、閑静な商業空間として評価され、青山通りに分布するクラスター C2 では「道が広い・清潔」と物理的環境が評価されている。

### (iv) まとめ

以上から来街歴が短いと空間と選好理由の関係が単純なものであるのに対し来街歴が長くなると、それぞれの場所に対する評価の与え方がより多様なものとなっていく傾向があると解釈できる。これは来街頻度と非常に類似した傾向であると言える。

## 6. 行動圏域と選好圏域の関係

### (1) 被験者全体の行動圏域と選好圏域の分布の差分

本章では4章と5章で分析した、選好圏域と行動圏域の空間的な関係について分析を行なう。各メッシュ毎に、Q8<雰囲気が良いと思う場所>で回答した人数とQ7<現在よく行く場所>で回答した人数との差を「選好一行動差分」として表した【図8】でをみると、差分がマイナスになる部分とプラスになる部分がある事がわかる。マイナスの分布はQ7<現在よく行く場所>として挙げられてはいるが、それに比してQ8<雰囲気が良いと思う場所>として挙げられず、評価されていない場所だと解釈できる。プラスの分布は、Q7<現在よく行く場所>として挙げられた人数以上にQ8<雰囲気が良いと思う場所>として挙げられて、よく行く場所ではないにしろ訪れたことのある場所であり、選好圏域として評価されていると解釈できる。この解釈からマイナスとプラスの分布の空間的配置を見ると、竹下通りでは特にマイナスの分布が集中し、その差は30名以上にのぼる。ついでラフォーレ原宿でも30名近いマイナスの差分が見られる。神宮前交差点から南側の明治通り沿いでもマイナスの分布が見られ4名から11名程度のマイナスであった。表参道周辺を中心とした圏域ではプラスの分布が集中し、その差は50名近くにのぼっている。ついで南側の遊歩道沿いでも15名前後のプラスの分布が見られる。以上のうち特に、渋谷との連絡路であり併走している明治通りと遊歩道は、前者がマイナスで後者がプラスの分布になっている。これより、被験者が明治通りより遊歩道を選択していることが伺える。またその理由として5章で述べたように、来街者の選好理由パターンによって、繁華な雰囲気以外にも落ち着きや個性を持った空間を求める被験者が遊歩道を選択していると考えられる。

## (2) 来街頻度から見た選好圏域と行動圏域の比較

来街頻度ごとに「選好—行動差分」を示したものが【図9】である。「頻度高」では、「選好—行動差分」は全域的に少ない傾向が見られる。「頻度中」では、最もその差が大きく、選好圏域と行動圏域のずれが大きくなる。「頻度低」では、「頻度中」に比して選好圏域と行動圏域が一致している。来街頻度からみた「選好—行動差分」の変化を空間的配置から考えると、来街頻度が高い状態では、竹下通り周辺は行動圏域として選択する被験者の減少以上に、選好圏域として選択する被験者が減少したため選好圏域と行動圏域の一致が進んでいる。また、表参道と表参道南側の遊歩道では行動圏域として以上に選好圏域として選択される傾向が見取れ、選好圏域として評価が高まっていることを意味していると解釈できる。また全域的にも差分が減少している傾向が見られ、選好圏域と行動圏域が一致を見ると理解できる。以上から、来街頻度が高くなると選好圏域と行動圏域の一致が単調的ではなく一旦ずれが大きくなる過程を経て段階的に進み、来街者が自分の好む空間を行動圏域として選択するようになってきていると解釈できる。

## (3) 来街歴から見た選好圏域と行動圏域の分布の差分

同様に来街歴ごとに「選好—行動差分」を示したものが【図10】である。「来街歴長」では「選好—行動差分」は全域的に少ない傾向が見られる。「来街歴中」では最もその差が大きく、選好圏域と行動圏域のずれが広がっている事がわかる。「来街歴短」では「来街歴中」に比して選好圏域と行動圏域が一致している。来街歴からみた「選好—行動差分」の変化を空間的配置から見ると、来街歴が長い状態では、竹下通り周辺は行動圏域として選択する被験者の減少以上に選好圏域として選択する被験者が減少したため選好圏域と行動圏域の一致が進んでいると解釈できる。また全域的にも差分が減少している傾向が見られ、選好圏域と行動圏域が一致を見ると理解できる。

以上から、来街頻度と同様に、来街歴が長くなると選好圏域と行動圏域は一旦そのずれが大きくなる過程を経てから、来街者が自分の好む空間を行動圏域として選択するようになってきていることがわかる。

## (4) まとめ

来街頻度においても来街歴においても、経験の高まりによる選好圏域の変化の過程と行動圏域の変化の過程は異なることから、選好圏域と行動圏域のずれが起こっている。つまり来街者が選好圏域と行動圏域を一致させていく過程は、街の経験の深化に対し単調に選好圏域と行動圏域の拡大が起こるわけではなく、選好圏域の広がり度合いが行動圏域のそれより積極的に進むことにより一旦ずれが生じる過程を経て、来街者の街空間における行動と意識が一致に至ることがわかった。

## 7. 結論

- 1) 来街者は、来街頻度や来街歴などその街を実際に経験するに促す街の中に次第に行動圏域を広げ、さらに隣接する商業空間である渋谷方面との徒歩圏としての繋がりもあることがわかった。同時に行動圏域の偏りも少なくなる傾向にあり、また、街の体験の深化によって行動圏域が拡大することが明らかとなった。
- 2) クラスタ分析を空間的データであるメッシュに対し行なったところ、各クラスターに属するメッシュが分散せず、いくつかの空間的なまとまりとなった。さらに、GISを用いることにより、クラスタ分析の結果を空間的、視覚的に表現でき、選好理由から分節された領域を考察できたことから、空間的な分析手法として有効であることがわかった。また、分節された各空間の物理的環境特性と各クラスターの選好理由の組み合わせパターンとの間には妥当な関係が見られた。これにより選好圏域と選好理由の結び付きを空間的に分析することができ、来街者の経験の度合いとの分析の結果、来街者は経験を深化させることで従来の繁華な商業空間だけでなく閑静さをも魅力として感じる様になり、空間の選好と選好圏域の形態が多様化していくことが明らかとなった。
- 3) 街における体験が深まっていく中で、選好圏域の拡大により行動圏域と選好圏域にずれが生じる過程を一旦経て、選好圏域と行動圏域の地理的な配置が一致していく傾向を、来街者の行動圏域と選好圏域の相関から把握することができた。

謝辞：本研究において愛知学院大学の松井啓之氏にはGIS分析等に関して多大な御協力を頂いた。ここに感謝の意を記したい。

## 参考文献・補注

- 1) 桑子俊雄(1999) 都市設計の思想とグローバリズム 都市計画 221, 16-19
- 2) 中田裕久ほか(1981) 都市空間の認知・評価に関する研究—その1 初期の環境の認知—評価—行動の構造— 日本建築学会論文報告集 306
- 3) 小林隆生ほか(1998) : 利用者意識からみた大学キャンパスと周辺市街地の連続性—大学キャンパスのオープンスペースに着目して— 日本都市計画学会学術研究論文集
- 4) 山本真理ほか(1999) : 年齢別に見る新宿御苑の利用形態と空間選択の要因に関する研究 : ランドスケープ研究 62(5)
- 5) 渡辺秀俊ほか(1993) : 都市化に伴う住民の意識行動変から見た親水行動特性に関する研究—都市住民の親水行動特性に関する研究その1— 日本建築学会論文報告集 449
- 6) 日本建築学会編(1987) 建築・都市計画のための調査・分析法 . 井上書院, 76-77
- 7) 半田庄司(1994) : 原宿1995 稲田表参道町会
- 8) 日端康雄(1993) 大都市周辺住宅地の定住政策にみられる土地利用規制の効果に関する一考察—東京都渋谷区神宮前地域を事例にして— 日本建築学会計画系論文報告集 第448号
- 9) 尚, 本調査結果において、【図1】における調査地点と被験者の行動圏域・選好圏域との関連は見られなかった。
- 10) 商店街振興組合原宿シャンゼリゼ会編(1994) : 原宿1993 商店街振興組合原宿シャンゼリゼ会, 11-15
- 11) 「街を経験する度合い」の尺度としては主に「延べ回数」「来街頻度」「来街歴」等が既往研究で挙げられているが、「延べ回数」は通勤、通学といった頻繁に訪れる被験者に対しては無意味であること、また街の経験の仕方が頻繁で期間は短いか、もしくは長い期間に継続的に街を経験しているか判断する為、本研究では「来街頻度」「来街歴」を尺度としてとりあげた。
- 12) 分布率とはメッシュ当たりの全被験者数に対する回答のあった被験者数の割合を示す。
- 13) クラスタ分析については、選好理由を因子に、メッシュ番号をサンプルにとり、Ward(1963)による方法を用いて標準化した後、標準ユークリッド距離を算出する方法で、StatSoft社の統計ソフト「StatPartner」を用いて行なった。
- 14) 6以外のクラスター数でも同様の分析を試みたが、クラスター毎の空間配置や、クラスターの意味内容が最も理解しやすかったため、本研究ではクラスター数が6となる様に非類似度を設定した。
- 15) 凡例の( )内は各クラスターに属するメッシュ数を示す。

**Summary :** The purpose of this paper is to recognize and clarify the alteration of the relationship between the town visitors' spatial preference and their behavior through the town experience. We interviewed with town visitors using the Sphere Graphic Method at Jingumae area, Shibuya ward, and analyzed the data with Geographic Information System and Cluster Analysis. The conclusions are follows. 1. The relation between preference sphere and behavior sphere has altered as visitors have experienced the town. 2. This alteration is observed not monotonic but bending process. 3. Through town experience, the visitors' preference sphere and behavior sphere become broadened and diverse and visitors structure the town in each one's way.